

新任教授紹介



医学部

きよかわ えつこ
清川 悦子 教授

病理学 I

平成23年8月1日付で、医学部病理学I教授を拝命いたしました。

私は生まれも育ちも教育も浜松で、このまま市内で病院勤務だと疑問もなかったのですが、感染症研究室の松田道行先生〔現京都大学医学部病態生物医学(旧第一病理)教授〕に出会い、大きく人生が変わりました。強い意志を持って医学部を選んだ訳ではないものの、病院実習にはそれなりの興味を持って臨み、どの科に入るのか迷いました。しかし同時に、臨床医というものに違和感を覚え、躊躇もしていました。そんな時、病理学の喜納 勇教授(故人)の、医療・医学に関する率直で印象的な呟きが蘇り、メジャーなものが苦手だったこと、形態観察・分類が好きだったことも相まって、入局と同時に大学院に進学しました。ある時、相村春彦助教授(現浜松医科大学教授)の後輩でロックフェラー大学・花房研究室帰りの松田先生が、医学部3学年生の講義に招かれ、蛋白質の相互作用が制御する細胞内情報伝達を面白く熱く紹介されました。スライド係りだった私は衝撃を受け、大学院途中から松田研究室に国内留学することになったのです。

私が今、金沢にいるのも偶然の積み重なりです。私がしたことを敢えていえば、変化を好んで進んだことです。様々な研究環境を経験したことを活かし、臨床・基礎の先生方と協力し、蛍光イメージングを道具に本学で新たな風を吹かせたいと思います。積極的に実験について語ることで研究をもっと身近に感じてもらい、学生の皆さんを刺激するように取り組む所存です。どうぞよろしく願いいたします。

【略歴】

- 1993年 3月 浜松医科大学医学部卒業
- 1997年 3月 浜松医科大学大学院医学研究科修了
- 1997年 4月 国立感染症研究所感染病理部研究員
- 1998年 9月 エイズ予防財団海外派遣研究者(ジュネーブ大学)
- 2000年 3月 理化学研究所スフィンゴ脂質機能研究チームフロンティア研究員
- 2001年 12月 科学技術振興機構/さきがけ研究21個人研究型研究員
- 2006年 4月 京都大学大学院医学研究科基礎病態学講座病態生物医学専攻助教
- 2008年 7月 京都大学大学院医学研究科基礎病態学講座病態生物医学分野講師
- 2011年 8月 金沢医科大学病理学I教授



医学部

この みゆき
河野 美幸 教授

小児外科学

平成23年8月1日付けで小児外科学教授を拝命いたしました。

昭和56年に広島大学医学部を卒業後、すぐに金沢医科大学小児外科学へ入局し30年が経ちます。入局後、多くの先生方の励ましや応援をいただき、これまでやってこれたことをこの場を借りてお礼申し上げます。私は梶本照穂初代教授(現名誉教授)の指導のもと、小児外科一般、新生児外科および小児泌尿器を学びました。平成9年には伊川廣道前教授(現名誉教授)より小児外科に腹腔鏡手術を導入するため慶應義塾大学医学部外科で勉強する機会を与えていただき、その年の冬に麻酔科、手術室の協力を得て小児の腹腔鏡手術を立ち上げることができました。現在まで、鏡視下手術の適応疾患を徐々に広げていき、本学病院の年間手術件数約300例のうち50例以上を占めるようになりました。今後も適応疾患を考慮しながら鏡視下手術のみならず *minimally invasive surgery* を追究していき、患児のQOL向上に尽力したいと考えております。

小児外科の重要な分野である新生児外科は母子総合医療のひとつとして、産科医、小児科医との連携協力が必須であります。本学病院NICUには小児外科疾患を有する母体あるいは新生児が石川県内のみならず富山、福井からも搬送されております。今年、念願の施設認定をうけ、診療看護体制も充実してまいりました。今後とも三科の協力体制を維持していき、さらなる新生児外科医療を提供できるように取り組んでいきたいと考えております。

その他にも、小児外科医が果たさなければならない課題は多くあります。現在、全国的に小児医療の危機が社会問題となっておりますが、今後も、北陸の子供たちのために役立つよう努力していきたいと思っております。

今後ともご指導ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

【略歴】

- 1981年 3月 広島大学医学部卒業
- 1981年 5月 金沢医科大学病院研修医
- 1982年 9月 島根医科大学麻酔学助手
- 1984年 4月 富山市民病院小児外科医員
- 1996年 10月 金沢医科大学小児外科学講師
- 1999年 11月 金沢医科大学小児外科学助教授
- 2009年 4月 金沢医科大学小児外科学特任教授
- 2011年 8月 金沢医科大学小児外科学教授